

例 言

1. 本書は、昭和61年10月15日から10月30日まで発掘調査を実施した、岐阜県高山市総和町1丁目83番地国分寺境内の発掘調査報告書である。岐阜県遺跡台帳には「飛騨国分寺塔跡（G12T00595）」として掲載され、また塔の心礎は国の史跡に指定されている。

本年、文化庁の補助を受けて本堂及び三重塔の防災工事（自火報、放水銃、貯水槽）が計画され、境内東北にある駐車場用地の貯水槽が設置される区域を調査した。

2. 調査主体 高山市教育委員会 教育長 谷脇豊歳
指 導 岐阜県教育委員会 文化課 三重大学教授 八賀 晋氏
調査事務局 高山市教育委員会 文化課
3. 本編の執筆、挿図作製、図版撮影等は田中彰が行なった。
4. 発掘調査にご理解とご協力をいただいた国分寺住職北原哲雄氏に感謝の意を表する。
5. 方位は磁北とした。

目 次

1. 国分寺の創設	2
2. 過去の建物解体及び発掘調査	3
3. 遺 構	5
4. 遺 物	11
挿図 1 伽藍様式	2
2 国分寺全体平面図	5
3 土層断面図	6
4 遺構平面図	7
5 瓦発見地点	7
6 現在の本堂と史跡「塔心礎」の位置平面図	8
7 あんらく亭 瓦出土土層断面図	8
8 辻が森三社境内礎石位置図	9
9 出土軒丸瓦、軒平瓦拓影	12
10 出土遺物（須恵器）	13

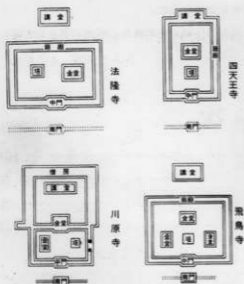
1. 国分寺の創設

仏教が伝来してから、畿内には40数箇所を超える寺院が諸豪族によって建てられ、仏教信仰の外観を飾った。豪族の間だけで信仰され、病氣平癒とか君親の幸福を祈る、現世利益の目的で崇拝されていた。堂塔伽藍の整った大規模な寺院は、崇峻天皇の5年(592)に仏堂と歩廊とを起工し、推古4年(596)に塔が竣工した飛鳥寺である。発掘調査により伽藍配置が明らかになり、挿図1でわかるように塔を中心に北方と東西に金堂がある。この形は高句麗の清岩里鹿寺跡にその前例が見られる朝鮮直模の形式である。

飛鳥寺と並んで伽藍の莊嚴を競ったのは法隆寺であり、聖徳太子創建による。この建物は天智9年(670)に焼け、四天王寺式伽藍配置(挿図1)をもっていたことが発掘調査によって昭和15年明らかになった。位置は若草伽藍跡といわれるところで、東院附近斑鳩宮に隣接する。現法隆寺は、焼失後寺地を変えて建てられたもので法隆寺式伽藍配置をもち、塔と金堂とが左右に並びその北に講堂を配する。

大化の改新(645)により律令体制が整え

挿図1 伽藍様式



図版1 法隆寺金堂



図版2 法隆寺塔

られることとなり、仏教も朝廷の信仰と統制を受けながら国家的施策として発展をみることになる。聖武天皇は、全国に国分寺及び国分寺建立の詔を発した。その時期は天平13年(741)であるとされるが、文の内容から判断するに天平10年(738)が正しいとする説がある。

建立の詔によると、1.国々に七重塔を造り、金光明最勝王経と妙法蓮華経をそれぞれ10部ずつ写し、別に天皇自ら金字の金光明最勝王経を写して塔ごとに安置すること。2.国ごとに僧寺と尼寺を置き、水田10町ずつ与える。3.僧寺には僧20人を配し、「金光明四天王護国寺」とする。尼寺には尼僧10人を配し、「法華滅罪之寺」とする。4.毎月8日には僧、尼僧とも必ず金光明最勝王経を転読すること。5.月の半ばには戒禱磨(ひらき)を読み(反省会)、毎月の六斎日(8, 14, 15, 21, 28, 30の6日)には殺生を禁ずることなどが挙げられている。しかし、国分寺建立は多大な費用がかかるため、容易には完成しなかった。税収入、郡司の特権などを与え、促進を図った。高山における国分寺創建年代は不明である。平安時代の末に地方政治が乱れるとともに、国分寺は衰退してゆくのである。

飛騨国分寺の伽藍配置は、昭和27年2月～29年10月の解体修理、発掘調査によって現本堂下層に礎石が発見され4×7間の建物址が発見されたものの、建物の種類は特定されていない。

2. 過去の建物解体及び発掘調査

昭和27年～29年に、文化庁、岐阜県、高山市の補助を受け総工費12,046,772円で本堂解体修理工事が行われた。その際、創建当時の礎石と推定される痕跡が確認された。また、建物解体時における徹底調査によって河上郡山田村から移されたという通説が訂正されるべきであるということが判明した。その概要を以下に記する。詳細については『飛騨国分寺本堂』（昭和30年4月重要文化財国分寺本堂修理工事委員会）を参照されたい。

当時は聖武天皇の詔勅によって建てられた飛騨国分寺だが、創建年代は不明、伽藍配置も明らかでなく、塔心礎と礎石群の一部、発掘瓦が確認されているだけである。弘仁十年(819)罹災の記事が日本逸史にあるが、程度、復興は不明。その後興廃を重ねたであろうが記録がなく、現本堂の建立年代も明らかでない。

現在の国分寺は金森氏が三木を攻めた際、兵火にあったのを、金森氏が再興し、本堂はこのとき山田村から移したというのが通説であった。しかし、建物解体の結果、建立以来解体をされたことがないと判明し(用材に時代差の認められる異分子が混在せず、檼、檼掛、丸桁等の釘打部分に余分の釘穴を存しないことから証明された)、大正時代における岡村利平、押上森藏、富田位峯による論争に結論を与えた。建物細部調査によって歴史が解明



右回國大野郡藤王山園寺内圖

図版3 天明5年(1785)庫裡焼失前の境内図

(一宮水無神社蘆荊州志附録)

された意義は大きい。

また、本堂東側1間通りが全部新規に修理されていたこと、室町時代の建築様式に一部桃山様式が介在すること、本堂東側に回廊接続痕が見られることなどから次のことが推察された。この建物は室町時代(おそらく中期以前)に建てられ、金森氏の三木攻めの際、回廊と本堂の一部が若干損傷した。同氏により修理をされ(図版4)、従来の室町様式との

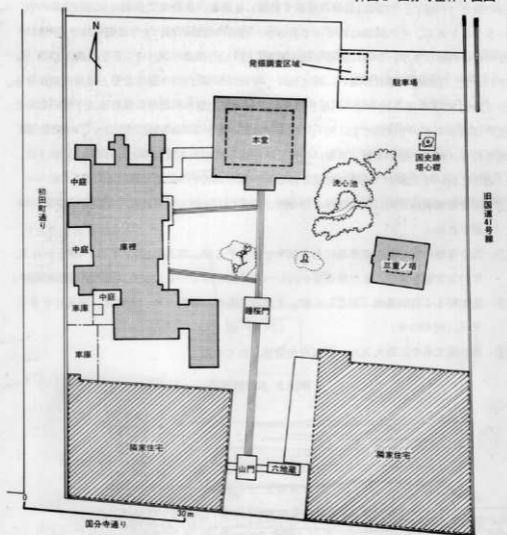


図版4 飛州千光寺記の一部(千光寺蔵)東経堂、回廊修理のこと

調和を図りながら桃山時代の新意匠を加味して改造を加え、統一ある堂となった。また、塔は図版3でわかるように本堂と回廊で結ばれており、文政の移築(現在地)の際に回廊が取り去られたのであろう。

3. 遺構

挿図2 国分寺全体平面図



発掘調査範囲は、防火水槽が設置される6×6mの狭い区域のみである。層序(挿図3)はI層が擾乱層(昭和の埋立て)、II層茶褐色土層、III層黄褐色土層(粘質で、旧国道41号線をはさんで東方にもこの層が見られる)、VI層黒色土層、V層黒茶褐色土層と続く。VI層黒茶褐色土層、VII層礫層は地山である。

V層に瓦片が分布し、V層下部が国分寺創建当時の奈良時代生活面であろう。現生活面推定レベルは、現地表面から平均130~145cmの深さを測る。創建当時の建物の基礎位置及び高さ、今回確認された生活面レベルとの関係がどうなるかは、今後の調査を待たな

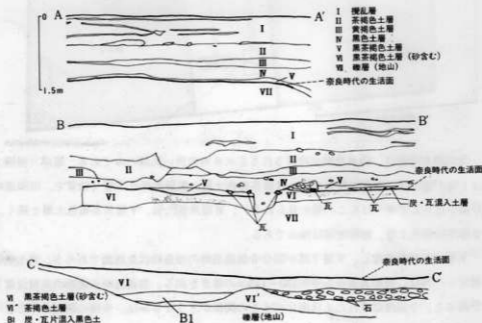
ればならない。

調査区の北端に瓦片を多く含む集石が2箇所認められ(挿図4)、地表からP1は158cmの深さ(西側)、P2は131cmの深さ(東側)を測る。また東に隣接して深さ60cmのピットP3がある。その間隔は約2mであるが、礎石の根固め石、または礎石抜き取り痕跡なのかは判断できず、さらに周辺を拡大調査しないと、わからない。P1は80×120、深さ31cmで、上部に川原石が覆い、軒丸瓦片、平瓦片が混じる。下層になると瓦片は減少する。P2は90×100cm深さ62cmで、円形をなす。平瓦片が上層の円礎中に混じる。下層になると瓦片は減少する。中央部に北に向って地山が傾斜しているのが挿図3のC-C'の断面で観察される。地山上層のVI層、VI'層については奈良時代の表土層と考えられる。

過去において工事中、瓦等が発見された例があるのでその位置を挿図5に記した。

- ① 国分寺庫裏南東角に公衆便所を作る際、深さ約1mから多量の瓦片を包含する層が確認された。
- ② 国分寺境内東北角の駐車場にある樹木を除去する際、深さ約120cmぐらいの所から瓦片の包含層を確認。また第III層が同レベルで広がっているのが見られた。(昭和61年)
- ③ 総和町1丁目50番地「あんらく亭」下水道工事中に軒丸瓦片、丸瓦片、平瓦片を多く発見。(昭和61年)
- ④ 桑谷屋工事中に軒丸瓦片、平瓦片が発見されている。

挿図3 土層断面図



今回、36㎡という極わずかな面積を発掘調査したのみであるが、市街地であるためまでに調査されたことがなく、今後も調査がむずかしいことが予想される。しかし、飛騨地方の奈良時代を知る上での歴史的実証と、国分寺伽藍の実態を知るという全国的にも重要な意味があるために、今後の調査が切望されるところである。

また、国分尼寺について大正時代、押上氏による辻が森三社境内地の礎石発見は周知の事実であるが、最近新しい礎石も発見されているのでここに境内全体測量図を掲載する。(挿図8) 辻が森周辺地区における建物新築に伴い、昭和55年11月、昭和60年11月、土層調査を行った。その結果昭和55年調査時には深さ80cmのレベルで黄褐色土を敷きつめた面を確認。遺物は、見られなかった。昭和60年時には、苔川の自然堤防であろうか、約1mの深さで砂層が堆積し、以下地山となっていた。辻が森周辺から発見されている軒丸瓦は、国分寺境内から発見されているものと同一であり、国分寺と国分尼寺との関係を解明する上で重要である。

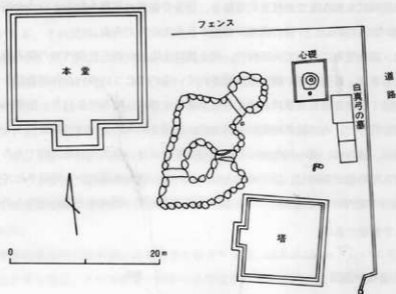
挿図4 遺構平面図



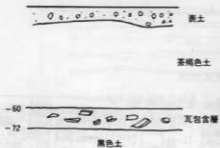
挿図5 瓦発見地点



挿図6 現在の本堂と史跡「塔心礎」の位置平面図

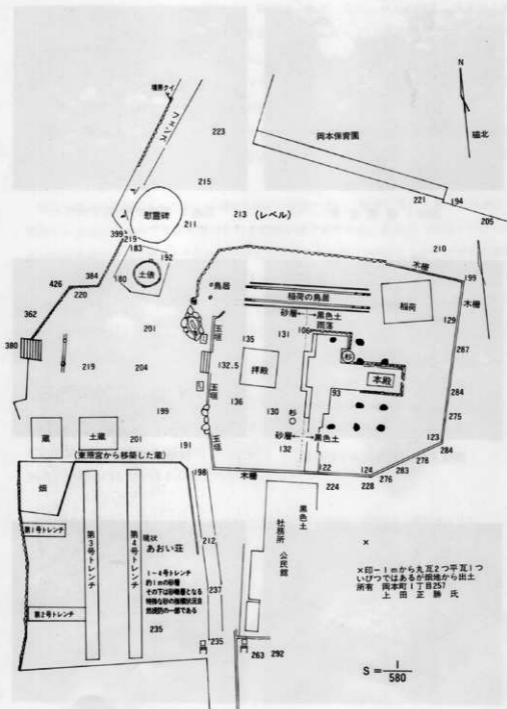


挿図7 あんらく亭
瓦出土土層断面図



図版5 瓦包含層(あんらく亭)

挿図8 辻が森三社境内礎石位置図





図版6 遺構全景



図版7 手前がP2 向うがP1



図版8 推定生活面の下部礫層



図版9 瓦出土状態



図版10 塔心礎



図版11 辻が森(推定国分尼寺)礎石

4. 遺物

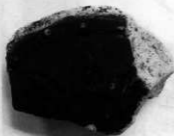
今回の調査で検出した瓦類は、軒丸瓦、軒平瓦、鬼瓦、丸瓦、平瓦の破片、須恵器の破片などがある。このうち、丸瓦、平瓦が多数を占める。軒丸瓦（挿図9）は7点の破片が検出された。単弁8弁蓮華文で、弁(3.5cm)と子弁は凸線で表わされ、子弁がわずかにふくらみをもつ(1)。中房は径4.5cmで1+4の蓮子をもつ。外区内縁に珠文があり、その数は国分寺瓦窟跡から出土した軒丸瓦と同様16個である。直径約15cmと推定、焼成は硬く灰色を呈するものと、焼成が悪く黄色がる軟質のものがある。2は弁3.5cm、中房4.5cmで、外区突帯に珠文が配されるところが違っている。焼成は悪く、表面は黒色、胎土は黄色がかり軟質である。

10は赤保木の窟跡のものだが、中房が3.5cmで寸法が違い、種類を異にする。11は過去に境内から出土したもので今回発掘のものと同寸法である。軒丸瓦（挿図9）については均正唐草文を主文様にし『飛騨国分寺瓦窟発掘調査報告』(1975)による7分類の形態中II、III、IV、VI類と同様のものがある。I～IV類は唐草に子葉を持ち、V～VII類は唐草のみである。I～IV類は国分寺瓦窟跡中初期の焼成で、V～VII類は最終期の窟内に遺存していたことが講査されている。焼成がよいものと、悪いものが混在する。

鬼瓦（挿図9-4）が1点検出され、左側下部のみである。周縁に突帯を設け珠文を配する。厚みは3.2cm、裏面は縄目の叩きが全面におこなわれている。焼成は良い。須恵器は35点、8世紀のものかほとんどである。



図版12 (挿図9-1)



図版13 (挿図9-2)

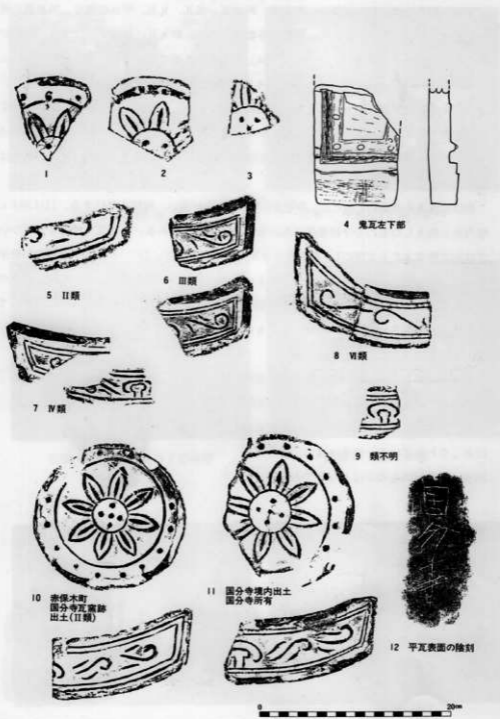


図版14 (挿図9-3)

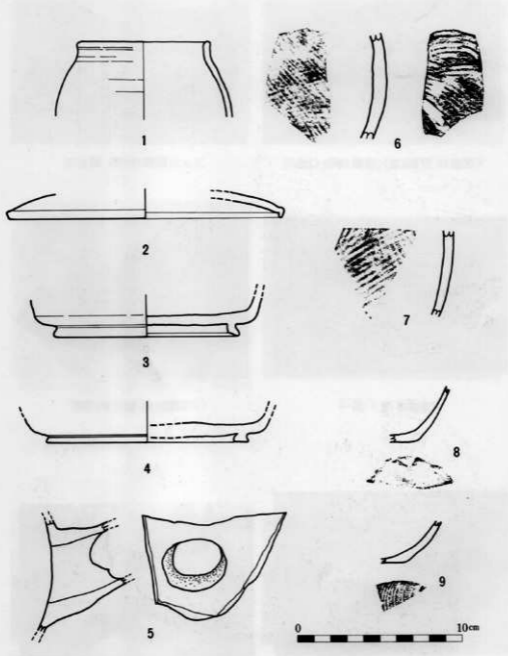


図版15 (挿図9-4)

挿図9 出土軒丸瓦、軒平瓦拓影 (1-9免摺による出土, 10赤保木遺跡出土, 11-12園分寺所有瓦)



挿圖10 出土遺物（須惠器）





図版16 II類(左)、III類(中央・右)



図版17 IV類



図版18 VI類



図版19類不明



図版20 国分寺境内出土瓦(国分寺所有)



図版21 赤保木窯跡出土瓦



図版22 赤保木窯跡出土瓦



図版23 国分寺境内出土平瓦陰刻文字



図版24 須恵器 (挿図10)



図版25 出土瓦全点



図版26 発掘前現況(現駐車場)



図版27 土層断面図

飛驒国分寺発掘調査報告書

昭和63年3月 発行

編集 高山市教育委員会
発行 高山市教育委員会
印刷 斐太中央印刷株式会社
高山市下三之町14